紙のおうちのヤンネマン

オランダ

昔むかし、あるところに、ヤンネマンという男の子がいました。ヤンネマンは、体がとても小さくて、親指ほどしかありませんでした。そして、古いトランプで作った紙のおうちにひとりで住んでいました。

ある日のこと、ヤンネマンがホットケーキを焼いていると、年取った魔女(まじょ)がやって来て、窓(まど)からのぞいていいました。

「なにをしてるんだね」

「ホットケーキを焼いてるんだよ」

「じゃあ、中に入っていいかい。わたしにもごちそうしておくれ」

「だめだよ。おまえなんかにやるもんか」

「そんなことといわないで、とびらを開(あ)けておくれ。おいしいりんごをあげるから」

「いやだ。ぼくは、年取った魔女になんか、とびらを開けてやらないんだ」

「じゃあ、きれいな銀(ぎん)のたばこ入れもあげるから」

「うん、それならいいよ」

ヤンネマンはそういって、とびらを開けてやりました。魔女はうちの中に入って来ると、ヤンネマンの両足をつかんで、頭からふくろの中につっこみました。そして、ふくろをかついで出て行きました。

まもなく、魔女は、からしを売っているお店の前を通りかかりました。お店の側(そば)で、道路工事のおじさんが仕事をしていました。魔女は、ふくろを下ろして、道路工事のおじさんにいいました。

「ねえ、あんた。このふくろを見ていておくれ。わたしは、からしを買ってくるからさ。ふくろの中には太ったにわとりが入ってるんだよ。」

「ああ、いいよ」と、おじさんはいいました。魔女はお店に入って行きました。

そのとき、ふくろの中から声がしました。

「おじさん、おじさん、道路工事のおじさん。ぼくは、にわとりじゃなくて、ヤンネマンだよ。ぼくをここから出してくれたら、たばこをあげるよ」

道路工事のおじさんは、びっくりしました。そして、大急ぎでふくろを開けてやりました。

ヤンネマンは、ふくろからぴょんと飛び出して、おじさんにたばこをあげると、ちょうどそこへかけて来たねこをつかまえて、ふくろの中に放りこみました。それから、一目散に走って、紙のおうちに逃げ帰りました。

やがて、魔女がお店から出てきて、ふくろをかついで歩き始めました。歩いていると、ふくろの中のねこが、にゃあおと鳴きました。魔女は、

「分かったよ、ヤンネマン。泣こうがわめこうが、おまえはもう逃げられないよ」といいました。

うちにつくと、魔女は、ふくろの中身をおなべにあけて煮ました。ところが、煮えたヤンネマンをお皿に出そうとすると、なんとそれは、ねこでした。魔女は、がっかりして、うめき声をあげました。

魔女は、また、ヤンネマンの紙のおうちにやって来ました。

「ヤンネマン、ヤンネマン、とびらを開けておくれ。大きななしをあげるから」

「いやだよ。おまえはぼくを、ふくろに入れてしまうもの」

「そんなことはもうしないから、開けておくれよ」

「いやだ。もう夜だもん。ぼくはだれにもとびらを開けないんだ」

「じゃあ、金のたばこ入れもあげるから」

「それならいいよ。えんとつから入っておいで」

魔女は、ほうきにまたがってえんとつに飛びあがり、家の中に入って来ました。そして、ヤンネマンの髪の毛をつかんで、頭からふくろの中につっこみました。それから、ふくろをかついで出ていきました。

まもなく、魔女は、コーヒー豆を売っているお店の前を通りかかりました。お店の側で、植木屋さんがかきねの手入れをしていました。魔女は、ふくろを下ろして、植木屋さんにいいました。

「ねえ、あんた。このふくろを見ていておくれ。わたしは、コーヒー豆を買ってくるからさ。ふくろの中には太ったにわとりが入ってるんだよ。」

「ああ、いいよ」と、植木屋さんはいいました。魔女はお店に入って行きました。

そのとき、ふくろの中から声がしました。

「おじさん、おじさん、植木屋のおじさん。ぼくは、にわとりじゃなくて、ヤンネマンだよ。

ぼくをここから出してくれたら、たばこをあげるよ」
植木屋さんは、びっくりしました。そして、大急ぎでふくろを開けてやりました。ヤンネマンは、ふくろからぴょんと飛び出して、植木屋さんにたばこをあげると、サンザシの枝をふくろの中につめこみました。それから、一目散に走って、紙のおうちに逃げ帰りました。
やがて、魔女がお店から出てきて、ふくろをかついで歩き始めました。歩いていると、ふくろの中のサンザシのとげが、魔女の背中をチクチクさしました。魔女は、
「分かったよ、ヤンネマン。わたしの背中を留め針でさそうが、縫い針でさそうが、おまえはもう逃げられないよ」といいました。
うちにつくと、魔女は、ふくろの中身をおなべにあけて煮ました。ところが、煮えたヤンネマンをお皿に出そうとすると、なんとそれは、サンザシの枝でした。手が傷だらけになりました。魔女は、大声をあげました。
魔女は、また、ヤンネマンの紙のおうちにやって来ました。
「ヤンネマン、ヤンネマン、とびらを開けておくれ。おいしいたまごをあげるから」
「いやだよ。おまえはぼくを、ふくろに入れてしまうもの」
「そんなことはもうしないから、開けておくれよ」
「いやだ。ぼくは、年とった魔女になんかとびらを開けてやらないんだ」
「じゃあ、金の時計もあげるから」
「うん、それならいいよ。台所の流し口からもぐりこんでおいで」
魔女は、またたくまに、ねこのようにやせて流し口からもぐりこみ、家の中に入って来ました。そして、ヤンネマンのえり首をつかまえて頭からふくろの中につっこみました。それから、ふくろをかついで出ていきました。
まもなく、魔女は、たばこを売っているお店の前を通りかかりました。お店の側で、掃除をしているおじさんがいました。魔女は、ふくろを下ろして、おじさんにいいました。
「ねえ、あんた。このふくろを見ていておくれ。わたしは、たばこを買ってくるからさ。ふくろの中には太ったにわとりが入ってるんだよ。」
「ああ、いいよ」と、おじさんはいいました。魔女はお店に入って行きました。
そのとき、ふくろの中から声がしました。
「おじさん、おじさん、掃除をしているおじさん。ぼくは、にわとりじゃなくて、ヤンネマ

ンだよ。ぼくをここから出してくれたら、たばこをあげるよ」

おじさんは、かみなりが鳴ったときのねこのようにびっくりしました。そして、大急ぎでふくろを開けてやりました。ヤンネマンは、ふくろからぴょんと飛び出して、おじさんにたばこをあげると、ふくろの中にどろをどっさりつめこみました。それから、一目散に走って、紙のおうちに逃げ帰りました。

やがて、魔女がお店から出てきて、ふくろをかついで歩き始めました。歩いていると、ふくろの中のどろから、水がぽたりぽたりと落ちてきて、魔女の背中をぬらしました。魔女は、「分かったよ、ヤンネマン。おまえがうんこをしようがおしっこをしようが、おまえはもう逃げられないよ」といいました。

うちにつくと、魔女は、ふくろの中身をおなべにあけて煮ました。ところが、煮えたヤンネマンをお皿に出そうとすると、なんとおなべの中はどろでいっぱいでした。魔女は、かんかんに腹を立てました。

魔女は、またまた、ヤンネマンの紙のおうちにやって来ました。

「ヤンネマン、ヤンネマン、とびらを開けておくれ。とってもきれいな物をあげるから」

「いやだよ。おまえはうそつきだ」

「そんなことはない。誓ってあんたにあげるから。ほら、ここにあるんだよ」

「でも、おまえは、また、ぼくをふくろにつっこむ気だろ」

「そんなことしない。もしそんなことしたら、わたしは死んでみせるよ」

「それならいいよ。もしカギ穴からもぐりこめるんなら、入ってきてもいいよ」

魔女は、うなぎのように細くなって、カギ穴を通って家に入って来ました。そして、ヤンネマンをふくろの中につっこんで、背中にかついで出ていきました。

魔女は、大急ぎで歩いてうちに帰りました。今度はとちゅうでどこにも寄りませんでした。うちに着くと、魔女は、ヤンネマンをふくろから出していいました。

「ヤンネマン、まな板を持っといで」

「わかったよ」といって、ヤンネマンは、大きなまな板を引きずって来ました。魔女はいいました。

「ヤンネマン、おのを持っといで」

「わかった」

ヤンネマンは、おのを引きずって来ました。魔女はいいました。
「ヤンネマン、おまえの頭をまな板の上に乗せな」
「いやだ、いやだ。ぼく、どうやったらいいか、わかんないもん」
「ただ、頭を乗っけるだけでいいのさ」
「いやだ。わかんない。おまえがまずやって見せてよ」
「しょうがないねえ。こうやるんだよ」
魔女は、そういって、頭をまな板の上に乗せました。ヤンネマンは、すばやくおのをひっつかみ、魔女の頭をぽんとちょん切ってしまいましたとさ。
おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話26オランダ・ベルギー』小澤俊夫訳／ぎょうせい